

令和元年度地域づくり海外調査研究事業調査報告書

フィンランドに見る子どもの学びと居場所づくり

調査地：フィンランド
調査日：令和元年9月22日～24日

一般財団法人地域活性化センター
総務企画部 企画グループ 齊藤 ゆか

報告書概要

総務企画部 企画グループ 齊藤 ゆか

調査テーマ

「フィンランドに見る子どもの学びと居場所づくり」

調査の目的

派遣元である山梨県北杜市では、自立心に満ちたくましい子どもを育てる『原っぱ教育』を提唱するとともに、放課後子どもたちが楽しく過ごせる居場所づくりを推進している。少子高齢化、グローバル化、AIの発達などにより急速に社会が変化中、その変化に対応できるたくましい子どもを育てるための教育を実践する上で、行政がなすべきことへの気づきを得るため、教育先進国のフィンランドを視察した。

調査結果

- ・レンパーラ市「サーカスヤルビ総合学校」では、授業の中で子どもたちの自主性を尊重し、やりたいことを選択する機会が創出されていた。子どもたちは地元企業への職場体験や商品開発を行うなど、実践的に社会と関わっていた。
- ・タンペレ市「メツォ図書館」では、本を読むだけでなくイベント開催や楽器の演奏ができるスペースが用意され、多様な利用を可能にしていた。学校とも密に連携し、子どもたちにとって地域の居場所のひとつとなっていた。
- ・タンペレ市内ユースセンター「Monitoimitalo13」及び「Youth center Muru」では専門的な知識を持ったコーディネーターを中心に子どもたちが必要としている支援を行うことで、「若者がやりたいことを自分で見つけることのできる場」を提供するという役割を果たしていた。

提案

北杜市でも図書館などの公共施設を活用し、学校と連携しながら子どもたちが多様な体験ができる設備を整えるとともに、フィンランドのコーディネーター（教育に関する専門的なカリキュラムを習得した者）のような存在を設置することなどが必要だ。こうした施設を子どもたちが学校の勉強を補足するためだけの場ではなく、「幅広い分野での主体的な学びの場、社会とつながることができる場、悩みを相談することができる場」とすることで、子どもたちがたくましく生きる力を育てていくことが重要である。

目次

1. はじめに	P 1
(1) 我が国の教育指針	
(2) 北杜市の教育指針	
2. 調査地の選定	P 3
3. 調査結果	P 4
(1) レンパーラ市サーカスヤルビ総合学校	
(2) タンペレ市メッツォ図書館	
(3) タンペレ市内ユースセンター 「Monitoimitalo13」、 「Youth center Muru」	
4. まとめ	P 9
5. おわりに	P 10

1 はじめに

近年、我が国の社会構造は、少子高齢化、グローバル化、AIの発達などにより急速に変化している。これからの社会の担い手である子どもたちには、この急速な変化に対応する力が求められている。一方で、平成26年度には文部科学大臣から中央教育審議会への諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」において、子どもたちについて「判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べること」について課題があり、「自己肯定感や学習意欲、社会参画の意識等が国際的に見て低いこと」が指摘されている。上記諮問を受けて、中央教育審議会は平成28年12月に答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」を出し、その中で「教員が何を教えるか」ではなく、学びによって子どもが「何ができるか」を自ら理解できる指導をしていくことや、学校は社会と連携・協働しながら子どもたちの能力を育てていくことを重視した学習指導要領とする必要があるとの考えを示した。

(1) 我が国の教育指針

上記答申を受け、文部科学省は平成29年3月に新学習指導要領を公示し、これに沿った新教育課程が平成30年度から順次実施されている。

この新学習指導要領では「子どもたちが社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成する」ことが目的とされ、子どもたちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」が重視されている。

子どもたちに求められる資質・能力は、次の3点である。

- ①実際の社会や生活で生きて働く知識及び技能
- ②未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力など
- ③学んだことを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性など



▲新学習指導要領説明図（文部科学省 HP より抜粋）

(2) 北杜市の教育指針

筆者の派遣元である山梨県北杜市は平成16年から18年に8町村が合併して設立された市であり、人口は約47,000人(2019年5月現在)で、市内に小学校11校、中学校9校、公立、私立含めて高校4校がある。また、8つの市立図書館が旧町村ごとに点在している。

北杜市の学校教育では「新しい時代を切り拓き生きていく子ども達は、幾多の困難に打ち勝つ精神と実行力を持ったたくましい人間の育成が必要」との考えから創り出された『原っぱ教育』を提唱している。これは、自然や人材、文化施設など、子どもの教育に資する地域の資源を十分に活用した原体験や実体験を重視した教育を推進しようというものである(図1参照)。

『原っぱ教育』のねらいは次の通りである。

①目標『不屈の精神と大志を持った人材の育成』

知性に富んだ心豊かで自立心に充ち、心身共に健康で郷土愛あふれる人づくりを目指す。この目標を学校教育や社会教育において推進する。

②重点目標

- ・知性に富んだ、心豊かな人づくり
- ・徳性が高く、人に迷惑をかけない温かい心を持った人づくり
- ・体を鍛え、汗をかくことの尊さがわかる人づくり
- ・感性が豊かで、清く正しく協調性のある人づくり
- ・自然を愛し、心身共にたくましく思いやりのある人づくり

「知・徳・体・感・自」の習得

③目指す子ども像

『夢を持ち、未来を切り拓く心身ともにたくましい北杜の子ども』

市では「第2次北杜市総合計画」の中でも、基本構想に「教育・文化に輝く杜づくり」を掲げており『原っぱ教育』を充実させることが大きな目標となっている。また「教育・文化に輝く杜づくり」の中で、子どもの居場所づくりについても触れられており、「保護者が安心して就労できるよう、放課後、児童が友達と一緒に楽しく過ごせる居場所づくり」として公営アカデミーの開設を推進するとしている。この公営アカデミーは、地域の人材(教員のOB・OGや大学生等)を活用して、夏休み期間中に小中学生を対象とした自主学習の支援を行う場である。

これらの北杜市の取組は、国の教育の方針に沿ったものであると同時に、地域の資源を活かし、住民の声を反映させたものである。



▲図1. 「原っぱ教育」チャート図

2 調査地の選定

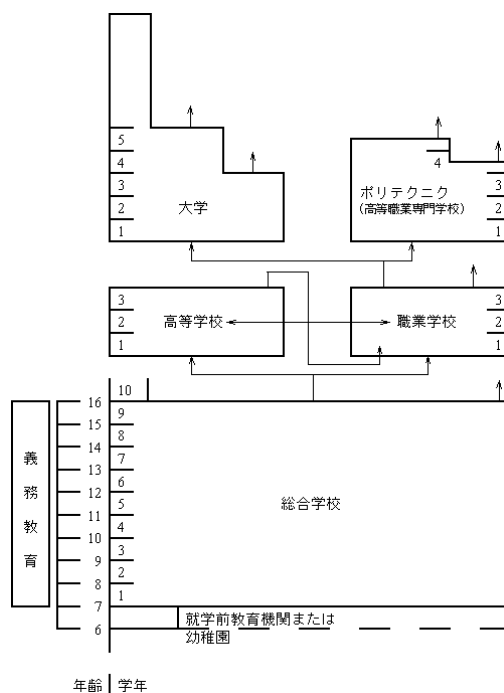
『原っぱ教育』及び「放課後、児童が友達と一緒に楽しく過ごせる居場所づくり」の実現に向けて、行政がなすべきことの気づきの一助を得るため、教育先進国のフィンランドを視察地に選定した。

フィンランドは、33.8万km²と我が国とほぼ同じ面積で、人口は約550万人、1人当たりのGDPは約4.9万ドルである(2018年時点)。また経済協力開発機構(OECD)が実施した国際学習到達度調査(PISA)^{注1}の成績では読解力、数学的応用力、科学的応用力の3つすべての分野で上位にランクされている。アクティブラーニングを早くから取り入れ、子どもたちの主体性を高める教育を実施しており、教育先進国として世界から注目されている。競争させるのではなく、気づきを与え、引き出し、サポートするという考えのもと、子どもたちは「何のために学習するのか」を理解しながら学びを深めていく。

フィンランドの教育システムでは、義務教育は総合学校での9年間となっている。これは我が国の義務教育にあたる小学校6年間と中学校3年間と同じ長さであり、総合学校卒業後は高校か職業学校に進学するかを選択する。職業学校とは、特定の職業について実践を交えて専門的なことを学べる学校である。高校もしくは職業学校を卒業後は、大学や高

等職業専門学校へ進学するか、あるいは就職することとなる（図2参照）。

また、総合学校から大学まで学校のほとんどが公立であり、教育費は原則無償である。学費以外にも交通費、教材費、給食などが無償であり公的支出の割合が高い一方で、国民の負担割合も高い。フィンランドの教育では「全ての人々が平等に質の高い教育や訓練を受けられる」という方針のもと、学校教育も生涯学習の中に位置づけられている。この教育方針は、広く国民に受け入れられており、我が国の「社会に開かれた教育課程」の理念にも通じている。



▲図. 2 フィンランドの教育システム
(文部科学省 HP より抜粋)

3 調査結果

フィンランドでは、レンパーラ市サーカスヤルビ小学校、タンペレ市メツォ図書館、市内2か所のユースセンター「Monitoimitalo13」、「Youth center Muru」を視察した。

(1) レンパーラ市サーカスヤルビ総合学校

レンパーラ市は、フィンランドの南部に位置するピルカンマー地方にある人口約 23,000 人の自治体であり、今回の調査ではレンパーラ市立サーカスヤルビ小学校を視察した。同校には児童・生徒が約 840 人通っており、約 60 名の教員がいる。同校ではいくつかの授業を視察するとともに、ジュッシ・カルヤライネン校長、教員、生徒に話を伺った。

①教育環境

9年生の生徒2人に案内され、図工、家庭科、美術、手芸、数学の授業を視察するとともに、学校の特徴、授業の概要などについて説明を受けた。同校では、主体性を高めるため、視察の案内は生徒自身が行うとのことであった。

教室には、各々の授業で使用する機器が十分に整えられていた。

印象的だったのは、図工の授業である。3年生の図工の授業を視察したが、図工室には工具や電動カッターなど様々な機器が備えられており、専門的な機械もいくつかあった。生徒たちは、様々な工具を使っていたが、工具の中には危険を伴うため我が国の授業では使わないものもあった。担当教員の話では、図工の授業は最大16名の生徒に対し1名から2名の教員で行っており、工具や機械の使い方、材料の特徴など基礎的な知識を身に付けた後、各々で考えたものを好きなように工作していくとのことであった。危険を伴う工具については、その工具の特徴をしっかりと学び試行的に使用し、その工具の危険性を生徒自身に把握させることで、大きな事故の発生を防いでいるという。危険を伴う工具を含む様々な機械や工具を教室に設置できる背景には、こうした指導方針がある。



▲3年生の図工の授業の様子



▲8年生の美術の授業の様子

②子どもが選択する機会の創出

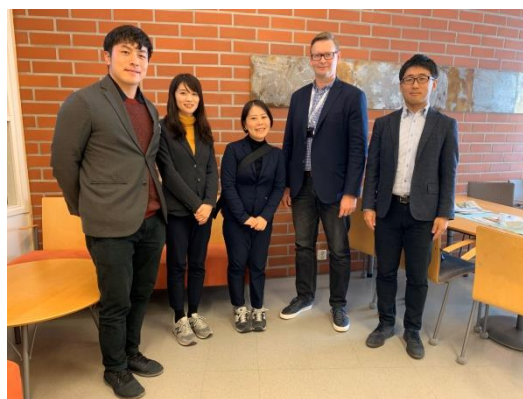
総合学校では、7年生までに必修授業を受け、基礎的な知識を身に付けた上で、8～9年生で選択制の授業となる。例えば、音楽については、8～9年生時に演奏や演劇を選択できるなど、より専門的なことを学べる授業に発展していき、自分が何を学びたいのかを自由に考えさせる仕組みとなっている。また、家庭科の授業では、8年生時に飲食業などで必要となる食品管理に関する資格を校内で取得できるなど、興味のある分野を深く探究できる機会が用意されている。

③社会との関わり

社会との関わりが特に重要視され、3年生時には、遠足の費用を自ら調達するためにマーケットに商品を出品するなど、幼いころから実践的に社会とつながる機会が創られている。

また、8年生で1週間、9年生で2週間の地元企業での職業体験が行われており、我が国の職業体験よりも長い。これまでに、生徒が考えた商品のラベルが実際に採用されるなど、商品開発にも生徒の発想が取り入れられている。

サーカスヤルビ総合学校では、生徒の主体性を尊重した授業、学校の指導方針に触れることができた。



▲対応してくれたジュッシ・カルヤライ
ネン校長（右から2人目）

(2) タンペレ市メッツォ図書館

タンペレ市は、首都ヘルシンキから北へ180 kmに位置する人口約20万人の都市である。市の中央図書館であるメッツォ図書館を視察するとともに、職員のエリナ・パボラ・エスコラ氏に話を伺った。

①施設概要

メッツォ図書館はタンペレ市の図書館ネットワークの中心であると同時にピルカンマ地方の広域図書館でもある。周辺の22の自治体では、同一のカードで地域内のどこの自治体の図書館も利用することができる図書館管理システムを使用しており、当館はその中でも中心的な役割を果たしている。

②図書館の役割

フィンランドの図書館法では、「図書館は生涯学習、アクティブ・シティズンシップ（責任感や公共精神を持って社会参画すること）、民主主義と表現の自由を促進する」と規定されており、メッツォ図書館もこの役割を担っている。

館内には、楽器を演奏する防音スペースや子どもたちがゲームを楽しむスペース、横になってくつろげるスペースなどが設置されており、我が国の従来型の図書館と比較して、より開放的で自由な空間となっている。もちろん自習等ができるスペースもあり、多様な利用が可能となっている。

さらに館内にはイベントスペースも設置されており、演奏会や朗読会など、様々な世

代が参加できるイベントを定期的に行っているとのことであった。



▲館内の様子。吹き抜けの天井からは光が注ぎ、開放的な空間となっている



▲子どもたちが自由に遊べるスペース

③学校との連携

同図書館は子どもたちが授業に必要な書籍があればすぐに用意できるシステムを整えるなど、学校と密接な連携をとっており、授業の一環として図書館を利用することも多々あるという。多くの学校で図書館担当の教員を配置しており、図書館担当の教員と情報交換することにより、子どもたちに求められる学びに適した書籍を迅速に提供している。

学校と連携することで、子どもたちは図書館をより身近なものとして捉え、地域の中の居場所のひとつとなっていることが窺えた。

(3) タンペレ市内ユースセンター「Monitoimitalo13」、「Youth center Muru」

タンペレ市では、市内にある2ヶ所のユースセンターを視察し、Monitoimitalo13のコーディネーター アリ・ピエティラ氏、Youth center Muruのコーディネーター ハアパマキ・ジュハ氏に話を伺った。

①施設概要

ユースセンターは、市が運営する施設で29歳までの若者が利用できる。ユースセンターの歴史は長く、数十年前からフィンランドのいたるところに設置されており、タンペレ市内においては10を超えるユースセンターが設置されている。今回視察したMonitoimitalo13は5階建ての商業系学校を活用しており、Youth center Muruは、市内のスーパーマーケットに図書館とともに併設されている。利用時間は14時から20時で、施設、曜日によっては22時まで解放されている。特に13歳から17歳までの利用者が多く、放課後の居場所となっている。

施設内には、楽器を演奏できるスペース、手芸ができるスペース、ゲームができるスペース、カフェスペースなどのほか、舞台も設置され、演奏の発表などに利用されている。視察時にも幼い子どもから青年まで多くの利用者がゲームや読書をする姿が見受けられた。



②コーディネーターの役割

フィンランドには「ユースワーク」という若者の社会参画の促進と自立を促すための若者支援策がある。ユースセンターでは、

ユースワークに必要な専門的なカリキュラムを習得した者が「コーディネーター」としてユースセンターで働いている。彼らは「カウンセリングやコミュニティワークなどの対人スキル」や、「若者が新しい物事にチャレンジできる環境づくりのためのプランニングやマネジメントスキル」などを学び、実践的な活動を通して若者にとって必要な場づくりをしている。

その他にも社会教育や児童福祉、若者を取り巻く社会環境、若者文化、青少年問題などについての知識も深めつつ、若者との信頼関係の構築に努めることで、精神的、家庭的な問題の相談に乗ることもあるという。

▲Monitoimitalo 13 施設内の様子（手芸スペース）。多くの若者が自由に過ごしている

③ユースセンターの役割

2人のコーディネーターは、「ユースセンターは若者がやりたいことを自分で見つける場である」という共通した認識を持っていた。

施設内には前述のとおり様々なスペースがあって、自由に利用できることに加え、Monitoimitalo13では、失業中の若者の再就職の支援としてメディアなどについて学べる講座を開いており、仕事を失った若者に、再び働くためのきっかけを与えている。

コーディネーターの中には音楽やメディアなど専門的な知識を持つ人もおり、若者に様々な指導が可能となっている。彼らは若者との信頼関係の構築に重きを置き、精神的、家庭的な問題の相談に乗ることもある。

④学校、地域との連携

ユースセンターは、学校や地域との連携にも努めており、行政、図書館、学校との情報共有を定期的に行うほか、実際に学校に出向いてユースセンターでできることやイベントなどについて子どもたちに紹介している。また、Monitoimitalo13では、月に一度

若者以外の誰もが施設を利用できる「オープンデー」を開催しており、地域の子どもから大人までが集まり、交流する場として機能している。

タンペレ市で起業をした若者から「学生の頃はよくユースセンターを利用して、たくさんの人とのコミュニケーションの場となっていた」との話を聞く機会もあり、ユースセンターが若者にとって居心地よく多くの人と触れ合える場所になっていることを実感した。



▲Monitoimitalo 13 のアリ・ピエティ
ラ氏（中央）



▲Youth center Muru のハアパマキ・ジ
ュハ氏（左から3人目）

4 まとめ

フィンランドでは、図書館やユースセンターなど学校外の公共施設を含む地域全体で子どもたちの主体性を高める取組を行っている。学校は、子どもたちの主体性を引き出すための授業を行い、図書館やユースセンターは「学び・体験・交流ができる場」として子どもたちに開かれた場所となっている。それぞれが密に情報交換をし、子どもたちに必要な取組を連携して行うことで、学校外の公共施設である図書館やユースセンターを利用する子どもが多くなり、子どもたちのニーズの把握も可能になる。我が国においても子どもたちの主体性を育むため、また子どもたちが求める居場所の創出のため、学校との連携をさらに進めていかなければならない。

また、ユースセンターのような子どもが多く集まる施設では、コーディネーターの役割が大きいことがわかった。ユースセンターではコーディネーターが子どものニーズを把握し、必要な設備を整え様々な分野の講座を開くなど、学びを支援することで、子どもたちにとって居心地の良い場所となっている。我が国においても、地域全体で子どもたちが生きる力を育むための社会環境を創っていくためには、ユースセンターのような子どもたちが集まる場所を設置することに加え、社会教育や児童福祉を学び、若者のニーズや悩みを聞くことのできるコーディネーターを配置することが必要である。若者が多様な人と交流

し、主体的に学び、体験できる場を創出するための環境を整備していくことが重要だ。

フィンランドには、若者の社会参画の促進と自立を促すための「ユースワーク」という若者支援政策がある。この政策は自治体が主体となって、若者の多文化活動の支援や、若者の生活環境を向上させるための情報提供、指導・助言を行うものである。今回の調査で視察したユースセンターは、このユースワークのひとつであり、学校の学習だけでは気づかない多様なものの考え方や価値観を育んでいた。今後、我が国でもユースワークという若者支援政策に習い、多様な人と交流し、主体的に学び、体験できる場を創出することを検討していく必要がある。

前述したように、現在、北杜市内には図書館が8館あり公営アカデミーの開設も進められている。今後、市が図書館に多様な体験ができる設備を整えたり、公営アカデミーにコーディネーターのような存在を設置するなど、これらの公共施設を子どもたちにとって学校の勉強を補足する場としてだけでなく「幅広い分野での主体的な学びの場、社会とつながることができる場、悩みを相談することができる場」とすることで、これからの子どもたちがたくましく生きていく力を育んでいくための後押しをしていくことが重要である。

5 おわりに

今回、海外調査研究事業という貴重な学びの機会を提供してくださった派遣元の北杜市と一般財団法人地域活性化センターに対して感謝を申し上げます。また、子どもたちに対する真摯な思いを伝えてくださったサーカスヤルビ小学校、メッツォ図書館および Monitoimitalo13、Youth center Muru のスタッフの皆様、細やかな気配りと分かりやすい通訳をしてくださった岸本育子氏、全体をコーディネートしてくださったエコ・コンシャス・ジャパン戸沼如恵氏ほか、調査にご協力いただいたすべての皆様にお礼を申し上げて結びとする。

【参考文献・資料】

- ・注 1：国際学習到達度調査（PISA） 経済協力開発機構（OECD）が行っている国際的な学力テスト。義務教育修了段階の15歳を対象に、「読解力」「数学的応用力」「科学的応用力」の3分野で2000年以降3年ごとに実施。知識や技能を実生活で直面する課題にどの程度活用できるかを評価する。
- ・大橋香奈・大橋裕太郎『フィンランドで見つけた「学びのデザイン」』フィルムアート社、2011年
- ・鈴木克彦「フィンランドの教育を読み解く～個人主義、柔軟性、基準、自己責任をキーワードとして～」<<https://ci.nii.ac.jp/naid/120003811476>>
- ・広島文教大学人間科学部教授鈴木浩之「最近における教育政策の動向と課題～学習指導要領改訂の背景～」<<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/h-bunkyo/detail/1241320180420092317>>
- ・文部科学省<<http://www.mext.go.jp/>>
- ・平塚眞樹「若者と居場所をつくる一日欧のユースワークの現場から」2018年<<https://ci.nii.ac.jp/naid/120006709147/>>
- ・田中治彦氏・萩原健次郎「若者の居場所と参加—ユースワークが築く新たな社会」東洋館出版社、2012年
- ・津富宏氏「『フィンランド若者法』（試訳）」国際関係・比較文化研究（静岡県立大学国際関係学部）第12巻第1号、2013年